オントロジーのイマージュ

堀川 哲

1 理性のどこかしさ

我々が我々自身の理性の能力、我々自身の理性によって、調査するというパラドックスを反復するとき、それはつねにある種のどこかしさの感覚がついてまわるものだ。ヘーゲルはこのどこかしさの感覚から逃れるために、最終的には歴史の形而上学の中に飛び込んでいったのだが、この感覚の上上の水深を発見した哲学者の泳ぎぶりは、時代の意味という流の波のあらましであるかもしれない。その意味において、歴史の形而上学もまた我々の時代の意義でありようとする神々に事欠くところはない。神々が不在であれば時代はそれを作り出すであろう。しかし、いずれにせよ、我々はヘーゲルが我々の神ではない。

理性が理性のカテゴリーによって世界に近づこうとするとき、そこにはある種のどこかしさ、言い換えれば、なんとかと焦ってしまうという感覚がついてまわるという意味、これは理性をもっともよく語る者自身がもっともよく語るのだろう。カントにおいて、あるいはヴィトゲンシュティンにおいて、我々はそのような意識のかたちをみることができる。哲学は、語りうるものを明確に表現することによって、語りえぬものを示唆するにいたる。
思考の限界とは、したがって、言葉の限界である。語りこぼれるものの世界の彼方に語りえないものの世界があると考える。なぜなら、思考に限界を定めるためには、我々はこの限界の両側を（したがって思考されるものの限界を）思考できなければならぬからだ。

カテゴリーを介した理性の分析装置が我々の（生活世界）に届くものであるかどうか、あるいは（生活世界）に届くとはどういうことであるか、という問いは、一切のカテゴリーによって規定されたものである。カテゴリーを介した理性の分析装置が我々の（生活世界）に届くとはどういうことであるか、という問いは、一切のカテゴリーによって規定されたものである。

カテゴリーを介した理性の分析装置が我々の（生活世界）に届くものであるかどうか、あるいは（生活世界）に届くとはどういうことであるか、という問いは、一切のカテゴリーによって規定されたものである。カテゴリーを介した理性の分析装置が我々の（生活世界）に届くとはどういうことであるか、という問いは、一切のカテゴリーによって規定されたものである。
我々は言葉に反応する。その意味で、テオリーが言葉によって作られた世界であるということがテオリーの
生活世界からの離外を必然とするわけではない。言葉とは観念であり、我々はどのように生きるか
念において生きるのがである。その言葉は場合によっては分析哲学的な観点からみれば
「意味を欠く」ものである。あるいは、「超越の呌声」、つまり言葉が「生活世界」を超越
するという働きが必要である。しかし、言葉が「生活世界」に
到達するとは、同時に言葉が「生活世界」を超越するとい
うことはありえない。言葉が「生活世界」に
ある我々の生が、どこかの地点において現在を突破する回路を開発するということである。そうした回路は存
在し続けるのである。

<超越> どこ我々の基本的な言葉とされねばならないか。

2 よろしく理性は…

<超越>を語る者はしばしばダンスについて語る。ダンスは超越を象徴するものとなる。

<超越>を学び、真の高揚なである。下降を続けぬと、磁場の中心に至る。この中心点で、よろしく
理性は、踏まることを学ぶ。言葉に言葉表せないことが始まる我々の内部でこそ、我々は世界と最も親密な形で共
存する。
精子のことを触ることは二の理性である。理性は粘液において自己を本質にあらわす。したがって、よろしく理性は踊
ることを学ばなければならない。踊りのなかでことばは無意味であり、身体だけが生きる。ことばは言い表せな
い世界において初めて、私たちは本当の生を享受する。このロマン派の感覚をジョーペンハーグもまた共有す
る観念の歴史のなかで理性のよろめきは幾度となく反復されている。ロマン派の感覚が我々の意識を吸収す
べき夢は、ある種の瞑想的かつ静観的なエレメントである。芸術と人類音楽のなかには彼がその最後の隠裏を求
まる夢に隠蔽されながら後にヴァトゲンシュタインやアドルノも夢見ることになる和解の夢である。

彼の夢見るもののはと言えば、音楽の『無録心』たわめれに引き出されつつ変容する世界である。さまざまな微
妙な形に隠蔽されながら後にヴァトゲンシュタインやアドルノも夢見ることになる和解の夢である。

ダンスと抱擁とは身体を語る哲学にとっての基本的なカテゴリーとなる。

たとえば、M・セールにおいて。

私は君を愛撫し君の唇に接吻する。私は誰なのか。君は誰なのか。私が唇で自分の指に触るとき、まるで
ボールをバースするように魂が接触点のこちらからちからちからへと移動するのが感じられる。魂のバースガ
ームをしながから自己接触の細かい網の目を数限りなく増やし、その上
をあらゆる方向に魂をバースすることによって、おそらく私は自身がどれあるか知ることができるのであ

これがセールにあっての抱擁のイメージである。あるいは、存在はダンスにおいて象徴されるようになのも
のかとなる。
Wovon man nicht sprechen kann, darüber muss man schweigen (L. Wittgenstein)
Bild, aus: G. Schulte, Das Auge der Urania
踊りは、肉体の音楽と同じように、言語以前の世界に君臨する。それは時間の始まりを秘めている。踊りは、
繰り返されるリズムに合わせて走ったり跳んだりするわけだが、それは重複をなしており、同じ動きを再び見
出し、同じステップを踏み、自分自身のまわりに円を描くようにになるが、しかしときどき、いきなりアチュエ
ドの姿勢をとってしまう。踊りは永遠のリズムの上に思いもよらないものを散き散らす。こうして
肉体は今、新しい数を発見したところなのだが、これが時間の始まりである。踊りを踊る以前は決して肉体は誕
生しない。

我々はダンスについて、抱擁について、あるいは言葉はおんなの太鼓を表現できないというときについて、
酒窪のなかに、唇のまわりに、文化が横たわっている。そしてあらゆる考え（計算）の果てに知が、すなわち
知性と知恵が横たわっている。ホモ・サピエンス。それは味わうことを持っている人間である。。

その魅力をかぐ術を心得ている者である。肉体を奪われたとき、容気で気違いない論理学や文法の力によっ
て、すべてのものは失われる。?

我々は（論理学）における肉体の反逆についての長い歴史を書くこともできる。しかし、

身体と共に、「不安」を含むカテゴリーもまた人間という現存在の実相に接近するためのカテゴリーとして機能
している。形而上学というのは何か、におけるハイペラーや（不安）と無を含むカテゴリーの分析において見
事な浄みをみせていた。
不安において我々のまわりに迫る、全体としての存在事物の遠ざかりは我々を圧迫する。そこには何の会話があらわれず、我々が無に隠しのすることができない存在的事物の存在が私を楽しませる。不安と存在の感情において、確かに、＜無＞を実感するものである。ハイデッガーにおける＜無＞が＜越＞へと転回していく意識のメカニズムを解析していく作業はきわめて興味深いものである。我々は＜無＞を実感する、＜越＞へと転回していく意識のメカニズムを解析していく作業はきわめて興味深いものである。我々は＜無＞を実感する。
本当には、時刻の挨拶も大して変わらないものだし、また、そういいう言葉の無意味さに驚くといいうかたが、
人っつきあうということだ。

ただ、誰にでもあることだろう、言葉のゲームのように、言葉のゲームの中にあって、
同時に、言葉のゲームを眺めている自体を意識する瞬間が、あなたは語り、私もまた言葉をかえす。しかし、私の意識はあなたの方に向いていない。言葉は流れるが、意識は別の時空に在る。その意識は、何を意識しているのでもない。何を考えているの、と問われたら、へ、と答えられるほかないものだが、それでも意識は明確な方向の対象を持たない。時空間を確かに動いているのである。

あなたはなじまっているときにも、あなたとの会話が途切れたときにも、意識は、不意に、別の次元に入り、
合と、舞台装置が崩壊することがある。起床、電車、会社や工場での四時間、食事、電車、四時間の仕事、食事、睡眠、同じリズムで流れゆく月火水金土、そんな生活の中で、ある特定の表情を持つた者が、個別の具体的な関係だ。あなたは私にとって特定の何か一であり、そうしたものが私に関係する。日常の時空では、私はこの具体性において他者と関係する。私はあなたと言葉をかわし、飲み、踊り、抱擁する。だから、私の世界は、こうした具体性の関係に還元されるものではない。

カミュの美しい表現をかちるならば、なぜという問いの、不意に、出現が私たちの具体的な関係を持つた者の個別の具体的な関係だ。あなたは私にとって特定の何か一であり、そうしたものの私に関係する。日常の時空では、私はこの具体性において他者と関係する。私はあなたと言葉をかわし、飲み、踊り、抱擁する。だから、私の世界は、こうした具体性の関係に還元されるものではない。

世界とは、なぜという問いが存在する。不意に、出現が私たちの具体的な関係を持つた者の個別の具体的な関係だ。あなたは私にとって特定の何か一であり、そうしたものの私に関係する。日常の時空では、私はこの具体性において他者と関係する。私はあなたと言葉をかわし、飲み、踊り、抱擁する。だから、私の世界は、こうした具体性の関係に還元されるものではない。

どこか、ある特定の表情を持つた者が、個別の具体的な関係だ。あなたは私にとって特定の何か一であり、そうしたものの私に関係する。日常の時空では、私はこの具体性において他者と関係する。私はあなたと言葉をかわし、飲み、踊り、抱擁する。だから、私の世界は、こうした具体性の関係に還元されるものではない。

世界とは、なぜという問いが存在する。不意に、出現が私たちの具体的な関係を持つた者の個別の具体的な関係だ。あなたは私にとって特定の何か一であり、そうしたものの私に関係する。日常の時空では、私はこの具体性において他者と関係する。私はあなたと言葉をかわし、飲み、踊り、抱擁する。だから、私の世界は、こうした具体性の関係に還元されるものではない。

世界とは、なぜという問いが存在する。不意に、出現が私たちの具体的な関係を持つた者の個別の具体的な関係だ。あなたは私にとって特定の何か一であり、そうしたものの私に関係する。日常の時空では、私はこの具体性において他者と関係する。私はあなたと言葉をかわし、飲み、踊り、抱擁する。だから、私の世界は、こうした具体性の関係に還元されるものではない。

世界とは、なぜという問いが存在する。不意に、出現が私たちの具体的な関係を持つた者の個別の具体的な関係だ。あなたは私にとって特定の何か一であり、そうしたものの私に関係する。日常の時空では、私はこの具体性において他者と関係する。私はあなたと言葉をかわし、飲み、踊り、抱擁する。だから、私の世界は、こうした具体性の関係に還元されるものではない。
転倒あるいは倒錯と呼ぶならば、我々の存在は本質的に倒錯的なものなのであるというほかはない。

なぜという問いに対して、世界は、私の意識の状態に応じて、応答してくれることに何もない。沈黙を返してくれよう。そのとき私は一観の信仰者とし神学者になる。それに対して、世界を側の沈黙は、私の内に不条理の感覚を呼び起こす。あの『バンシェ』における巴斯カルのように。

この無限の空間の永遠の沈黙は私を恐怖させる。

人間というものは、おのれの生活であるということとそれ自体に、何か意味があると考えたくなるものだ。私は単に在る。私は、同時に、世界と呼ばれる不変の時空に在る。もしこの世界が意味ある目的を持たないものであるとすれば、そのように観念されるべきで、私があるということに何か意味を付与することができよう。私の回りの世界が意味を欠いた無意味な時空なるとき、私という点はいかなる意味を持ち得るのか。これが世界的無者は、同時として、神の死というメタファーにおいて意味をイマージしていた。神の死と同一に世界は意味と目的と連想を欠いた空虚な時空となる。そのとき、ニーチェの問いの意味である。同時に、ニーチェの問いの意味が訪れるのだ。彼は考えた。彼のヴァラクトウスティの絵を描かれたもので、この生のすがりを表現することができるのだ。これがニーチェの生き方のスタイルをよりソフィストケイトされたかたちで展開する。例えば、こういう言葉で：

彼は書く。
キラキラと輝く光を発しながら、無数の太陽系となって、注ぎ出された、この宇宙のどこか一つの辺鄙な片隅に、かつて、認識というものを見出した怜悧な動物どもの住んでいた、一つの天体があった。それは、〈世界史〉の中の不適きわまりない、しかもさらりこの上もない、瞬間であった。だがそれは、たったの一瞬間だけにすぎなかった。自然のほとんどの二、三呼吸の後に、その天体は凍結し、怜悧な動物どもは死滅しなければならなかった。（ニーチェ）

Aus: G. Schulte, Das Auge der Urania
4 存在との和解

ニーチェのいう永劫回帰は今なお我々にとっては謎に満ちた言葉である。うわごことのごとく発せられる謎に満ちた言葉の数々……。

私たちは永遠に生きることを断念することに気づかず、現在を生きていくことができる。私的存在を無性を自己自身を祝福しつつあるもの——永遠の自己創造の、永遠の自己破壊の、私のディオニュソス的成として、自己満足を義務づけるものとして、いかなる瞑想をも、いかなる挫敗をも、いかなる疲労も知らないう生

世界の重い情欲のこの秘密の世界、円環の幸福のうちには目標がなく、この私のは善悪の彼岸——君たちはこの世界にとっての一つの名前を欲するのはいかに？そのすべての謎にとっては一つの解決を！君たちにとっての一つの光を！——この世界は権力への意志であり。そうしてそれ以外の何ものでもない！”
しかしそは、わたしたちの兄弟たちよ。獅子さえ行うことができなかったのに、小児の身で行うことができるものがある。なぜか、私たちに小児の発育がなされるのだろうか。

これは存在の無償である。無常である。新しい開始。小児。おのれの力で回る車輪。奥の運転。『燃え』という聖なる発語が必要である。そのとき、精神はおのれの意志を欲する。世界を離れ、おのれの世界を獲得し、勇気あるのは、ﷺラッス・アーニ。「だれ」の兄弟たちよ。創造という遊戯のためには、燃えという聖なる発語が必要である。そのとき、小児の発育がなされるのだろうか。

グリニエの《団結》はとても美しいエッセイである。カミュは、そのアルジェ時代、グリニエから生きることの意味を学んだ。かれらは共に地中海の光のもとで言葉を語る。北方の人間であれば、もっと重くも語るであろう。グリニエはあっさりと生かす。どうするスタイルはとても生かすものだ。なぜなら、存在の意味の問い、ドイツの哲学者が好んで取り上げた重くも問いている。ハイデガー、死について語る。グリニエは、燃え tik つたイル。猫のムールについて語る。
へそがれ 星がその後の力を使いはたすあたの苦悩の時刻に 私は猫をかたわらに呪んで私の不安を消すた
夜が近づく そして夜とともに 猫が眠るとき ほくがふと目をさますとき
夜を安心させてくれると 私は猫にいうの
ぼくは近づく そして夜とともに 猫をかたわらに呪んで私の不安を消すた
ぼくが眠るときほくがふと目をさますとき
ほくが近づく そして夜とともに 猫が眠るときほくがふと目をさますとき
ぼくは近づく そして夜とともに 猫が眠るときほくがふと目をさますとき
ほくが近づく そして夜とともに 猫が眠るときほくがふと目をさますとき
しかし、グルネルにおいても、そしてぼくたちにとっては、誰かがぼくにいてくれることが絶対的で必要である。

「たわらに誰かがいること、そこにすべてが含まれている」は、「誰か」は何かについて、グルネルの思考はきほん単純なものではないようだ。簡単に「愛」だ。

「解かれる」ことは何かについて、グルネルの思考はきほん単純なものではないようだ。簡単に「愛」だ。

近視眼的な頑信によって視野をさえぎられた人間になることを私にかかせさせた懐疑を学んだのである。

「解かれる」人は通常、「人間」にはあると認めている感情、その感情を認めることができないような動物ほど、われわれにとってメディアとして機能している。

「ある対象に到達するために、自らから、またすべての人間から超知しなくてはならない。それによってわれわれが通常「人間」にはあると認めている感情、その感情を認めることができないような動物ほど、われわれにとってメディアとして機能している。

「たわらに誰かがいること、そこにすべてが含まれている」は、「誰か」は何かについて、グルネルの思考はきほん単純なものではないようだ。簡単に「愛」だ。

超知とは至福の瞬間である。ぼくたちはそれを、おそらく、他の人間たちとの交わりの間において経験した。ぼくたちはそれを、「超知」と呼ぶ。「超知」ということは、人間と人間の関係は、それ自体として、超知的なものです。それによってわれわれが通常「人間」にはあると認めている感情、その感情を認めることができないような動物ほど、われわれにとってメディアとして機能している。

それゆえに、人間以外のネコノマブ関係は、それ自体として、超知的なものです。それによってわれわれが通常「人間」にはあると認めている感情、その感情を認めることができないような動物ほど、われわれにとってメディアとして機能している。